

[A年] 公現後第4主日(2025年2月2日)

【旧約聖書日課】創世記 28章10～22節

10ヤコブはベエル・シェバを立ってハラシムへ向かった。11とある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。12すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。13見よ、主が傍らに立って言われた。

「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。14あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。15見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」

16ヤコブは眠りから覚めて言った。

「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」

17そして、恐れおののいて言った。

「ここは、なんと畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。」

18ヤコブは次の朝早く起きて、枕にしていた石を取り、それを記念碑として立て、先端に油を注いで、19その場所をベテル(神の家)と名付けた。ちなみに、その町の名はかつてルズと呼ばれていた。

20ヤコブはまた、誓願を立てて言った。

「神がわたしと共におられ、わたしが歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、21無事に父の家に帰らせてくださり、主がわたしの神となられるなら、22わたしが記念碑として立てたこの石を神の家とし、すべて、あなたがわたしに与えられるものの十分の一をささげます。」

【使徒書日課】使徒言行録 7章44～50節

44わたしたちの先祖には、荒れ野に証しの幕屋がありました。これは、見たままの形に造るようにとモーセに言われた方のお命じになったとおりのものでした。45この幕屋は、それを受け継いだ先祖たちが、ヨシヤに導かれ、目の前から神が追いついてくださった異邦人の土地を占領するとき、運び込んだもので、ダビデの時代までそこにありました。46ダビデは神の御心に適い、ヤコブの家のために神の住まいが欲しいと願っていましたが、47神のために家を建てたのはソロモンでした。48けれども、いと高き方は人の手で造ったようなものにはお住みになりません。これは、預言者も言っているとおりで。

49『主は言われる。

「天はわたしの玉座、
地はわたしの足台。

お前たちは、わたしに
どんな家を建ててくれると言うのか。
わたしの憩う場所はどこにあるのか。」

50 これらはすべて、

わたしの手が造ったものではないか。」』

【福音書日課】マタイによる福音書 21章12～16節

12それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒された。13そして言われた。「こう書いてある。

『わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。』

ところが、あなたたちは
それを強盗の巣にしている。」

14境内では目の見えない人や足の不自由な人たちがそばに寄って来たので、イエスはこれらの人々をいやされた。15他方、祭司長たちや、律法学者たちは、イエスがなされた不思議な業を見、境内で子供たちまで叫んで、「ダビデの子にホサナ」と言うのを聞いて腹を立て、16イエスに言った。「子供たちが何と言っているか、聞こえるか。」イエスは言われた。「聞こえる。あなたたちこそ、『幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた』という言葉はまだ読んだことがないのか。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

創世記 28章10～22節

¹⁰ヤコブはベエル・シェバをたって、ハランへと向かった。¹¹ある場所にさしかかったとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。彼はそこあった石を取って頭の下に置き、その場所に身を横たえて眠り、¹²夢を見た。すると、先端が天にまで達する階段〔別訳→はしご〕が地に据えられていて、神の使いたちが昇り降りしていた。¹³すると、主がそばに立って言われた。「私は主、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神である。今あなたが身を横たえているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。¹⁴あなたの子孫は地の塵のようになって、西へ東へ、北へ南へと広がってゆく。そして、地上のすべての氏族は、あなたとあなたの子孫によって祝福される。¹⁵私はあなたと共にいて、あなたがどこへ行くにしてもあなたを守り、この土地に連れ戻す。私はあなたに約束したことを果たすまで、決してあなたを見捨てない。」¹⁶ヤコブは眠りから覚めて言った。「本当に、主がこの場所におられるのに、私はそれを知らなかった。」¹⁷そして怖くなって言った。「この場所は何と恐ろしい所だろう。これはまさに神の家ではないか。ここは天の門だ。」

¹⁸ヤコブは朝早く起きて、頭の下に置いていた石を取り、それを柱として据え、その上に油を注いだ。¹⁹そしてその場所をベテル〔→「神の家」の意〕と名付けた。その町の以前の名はルズであった。²⁰ヤコブは誓いを立てて言った。「神が私と共におられ、私の行く道を守り、食べる物、着る物を与えてくださり、²¹私が無事、父の家に帰ることができ、そして主が私の神となられるなら、²²その時、柱として据えたこの石は神の家となるでしょう。そこで私は、あなたが与えてくださるすべてのものの十分の一をあなたに献げます。」

使徒言行録 7章44～50節

⁴⁴私たちの先祖には、荒れ野に証しの幕屋がありました。これは、見たままの形に造るようとモーセに語った方のお命じになったとおりのものでした。⁴⁵この幕屋は、私たちの先祖が次々に受け継いで、目の前から神が追い払ってくださった異邦人の土地を所有したとき、ヨシュアと共に運び入れ、ダビデの時代に及んだものです。⁴⁶ダビデは神から恵みを得て、ヤコブの家のために神殿を建てたいと願いましたが、⁴⁷神のために家を建てたのはソロモンでした。⁴⁸けれども、いと高き方は人の手で造ったものにはお住みになりません。預言者が言っているとおりです。

⁴⁹『主は言われる。

「天は私の王座、
地は私の足台。

あなたがたは、私のために

どんな家を建てると言うのか。

私の憩う場所はどこにあるのか。」

⁵⁰これらはすべて

私の手が造ったものではないか。」』

マタイによる福音書 21章12～16節

¹²それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを覆された。¹³そして言われた。「こう書いてある。

『私の家は、祈りの家と呼ばれる。』

ところが、あなたがたは

それを強盗の巢にしている。」

¹⁴境内では目の見えない人や足の不自由な人たちが御もとに來たので、イエスは彼らを癒された。

¹⁵しかし、祭司長たちや、律法学者たちは、イエスがなされた不思議な業を見、また、境内で子どもたちまで叫んで、「ダビデの子にホサナ」と言うのを聞いて腹を立て、¹⁶イエスに言った。「子どもたちが何と言っているか、聞こえるか。」イエスは言われた。「聞こえる。『幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美の歌を整えられた』とあるのを、あなたがたはまだ読んだことがないのか。」

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・2月2日「公現後第4主日」の日課主題は「新しい神殿」。

・旧約聖書日課は、「創世記」から、「ヤコブの梯子」の説話箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、「ステファノの殉教説話」の中の説教の一部。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、「神殿清め」の説話箇所。

旧約日課(創世記 28 章より)

・「創世記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「律法(トーラー)」の第一巻。「天地創造譚」から始まる「原初の物語」(1~11章)と、「族長物語」(12~50章)で構成される。「族長物語」は、「アブラハム」からの四代の家族の物語として展開するが、物語構成としては前半の「アブラハム物語」(12章~25章前半)と後半の「ヤコブ物語」(25章後半~50章)に区分される。「族長物語」は、「律法(トーラー)」の続巻である「出エジプト記」で扱われる「モーセ」の時代より「四百年」(創15:13)以上前の時代のこととして設定されており、この二巻の間は事実上物語が断絶している。日課箇所は、「ヤコブ物語」の前半(25~36章)、「ヤコブとエサウの物語」を構成する説話箇所で、「ヤコブの梯子」として知られる。

・「ヤコブとエサウの物語」は、双子のヤコブとエサウが父イサクから受ける長子の祝福を巡って争った結果、ヤコブは家を出て母リベカの実家に身を寄せ、そこで伯父ラバンの娘たちと結婚し子らをもうけた後に、帰郷して兄エサウと和解を果たす物語として構成されている。日課箇所は、父イサクから祝福をだまし取ったとしてヤコブがエサウの怒りを買ひ、母の指示に従い父の家を出て母の実家に向かう途上での出来事として描かれている説話。この説話箇所は、「ヤコブ物語」中で初めてヤコブが神体験をした出来事として置かれており、この出来事にちなんで「ベテル」という地名が名付けられたという地名譚になっている。おそらく、これは、ユダ・イスラエルの王国史上もっとも重要な地方聖所の一つ「ベテル」における中心的な伝承譚と一つであったと考えられる。このような「ヤコブ伝承」は、「ペヌエル」や「シケム」などイスラエル各地の聖所で継承されていたと推認される。

・「ベテル」は、ヘブライ語「ベト(家)」+「神(エル)」で「神の家」の意。「列王記」でソロモンが建築した「主の神殿」は、原文を直訳すれば「主の家(ベト)」。

・12節「夢」は、神の啓示の手段として描かれているが、「創世記」中ではもっぱら「ヤコブ物語」で導入されており、「アブラハム物語」中での用例はアブラハムではなく「アビメレク」という人物の出来事として描かれるもの(20章)。「創世記」以外で「夢」が神の啓示として描かれるのは、「ギデオン」(士7章)、「ソロモン」(王上3章)などに限られる。

使徒書日課(使徒7章より)

・「使徒言行録」は、「ルカによる福音書」の続巻として編纂された歴史物語文書。主イエスの昇天と聖霊降臨を機に始まった「教会」の初期の出来事を、おもに「パウロ」に照準を合わせていくことで描いた「初代教会正史物語」として構成されている。「パウロ書簡集」の背景にある史実を知る上で最重要な史料に位置づけられる一方で、「パウロ書簡」の記述との齟齬や矛盾も見られ、評価は分かれる。「使徒言行録」は、「パウロ」という宣教者の果たした役割を強調することによって、使徒たちによってエルサレムで始められ、世界各地で展開されるようになっていた諸教会を、ひとつのネットワークの中に位置づけ、「共同教会」という共同体概念を明確にする意図をもって編集されたと考えられる。その編集意図に基づいて、出来事の起こった事情や仔細については、相当に恣意的な描写叙述がなされていると推認される。

・日課箇所は、初期のエルサレム教会共同体で「ギリシア語を話すユダヤ人(ヘレニスタイ)」のメンバーが多く加わったことによって生じた共同体内部の不和に対処するために立てられた「食事の世話をする者(ディアコノス)」の一人である「ステファノ」が、民衆の前で語った説教として伝えられている箇所の一部。初期のエルサレム教会共同体は、1章の記述によれば、ガリラヤから主イエスに従って来ていた者たちを中心とした「ヘブライ語を話すユダヤ人(ヘブライオイ)」によって構成されていたが、彼らの宣教は、まず、エルサレムの神殿に参詣に来ていた「ギリシア語を話すユダヤ人」たちに受け入れられ、彼らを共同体に招き入れることになった。彼ら「ギリシア語を話すユダヤ人」は、すなわち、いわゆる「ディアスポラ系ユダヤ人」であり、ローマ帝国各地で皇帝の名の下に保護され、商業活動を展開していた者たちである。彼らは、すでに地中海世界の共通語であるギリシア語を母語として用い、ギリシアまたはローマ風の通名を用いるようになる一方で、皇帝に保護された「ユダヤ人」としてユダヤ名やユダヤ人的生活(割礼、食物規定遵守、安息日遵守など)を維持していた。しかし、ユダヤ州やガラテヤ地方などに住む「生粋のユダヤ人」との間には、言葉以上にさまざまな習慣上の違いが生じていたと考えられる。初期エルサレム教会共同体は、主イエスの実践に基づいて、自分たちとは異質になった「ディアスポラ系ユダヤ人」を積極的に受け入れるという実践を始めたが、相互理解を深めていくことは容易ではなかったのだろう。

・「ステファノ」は、ギリシア名で紹介されるユダヤ人であり、明らかに「ディアスポラ系ユダヤ人」。彼の説教は「旧約」の伝える「イスラエルの物語」をなぞるものであり、「生粋のユダヤ人」とこれにおいて一致する者であることを示しているが、このステファノらを排除したのは、おそらく教会共同体内の「生粋のユダヤ人」である初期メンバーたちだったのだろうと推察される。

福音書日課(マタイ 21 章より)

・日課箇所は、「主イエスの受難物語」(マタイでは 21～27 章)の中に置かれた「神殿清め」の説話箇所。この説話は、配置される場面は異なるが、四福音書(マルコ 11 章、ルカ 19 章、ヨハネ 2 章)が共通して伝えている数少ないイエス伝承の一つ。

・四福音書で、説話の物語展開は基本的に一致しているが、場面設定や細部で相違がある。「マタイ」の大きな特異点は、14 節の記述で、これは他のどの福音書にも見られない。すなわち、マタイは、神殿境内で商売や両替などを行っている人々を追い出す一方で、そこに集まって来た病人たちを癒された、と描くことで、主イエスが否定されたことに対する代替案を提示していると言える。また、そのような癒しの働きがなされたことを子どもたちも含めて「ダビデの子にホサナ」と言っただけで、人々が褒めることに対して、祭司長たちや律法学者たちが批判をしたと描き、対立構図を明確にしている。他の福音書では、祭司長たちや律法学者たちが批判したのは、主イエスが境内で商売や両替をしている人々をおいだしたことを問題視したようにしか解釈できないが、「マタイ」は、この出来事における焦点を異なるに移して解釈するように求めている。

・主イエスがなされた「神殿清め」事件は、実際には、「マタイ」以外の福音書が示しているように、神殿破壊行為、神殿冒流行為として当局者らに問題にされた、というのが実際のところであろう。「受難物語」後半で描かれる「裁判」では、「神殿を打ちこわし、三日あれば建てることができる」(マタイ 26:61)などの発言が問題視されている。そのような発言が、実際の破壊行為と共になされたとすれば、当局による裁判にかけられたことは当然であっただろうし、「マタイ」以外の福音書は、そのことを否定していない。他方で、「マタイ」には、「山上の説教」にも示されるように、主イエスを「律法の義」において誰よりも卓越した人物として位置づける意図があり、主イエスの神殿破壊行為や神殿冒流行為のみに焦点が当てられることを避けたのかも知れない。

・それと共に、「マタイ」には、より積極的な意図があったことも推察される。境内から商売人や両替人を追い出して病人を癒したことを、「マタイ」は祭司長や律法学者にとっては「不思議な業」と描き、「祈りの家としての神の家」でなされるべきことを彼らが理解もせず、為すこともできない、ということを強調しているのである。

来週の誕生日 (2月2日～8日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-361「この世はみな」(= I 90 番「ここもかみの」)は、19 世紀末米国長老派牧師モルトビー・D・バブコックの作詞で、原歌詞は 16 節ある。曲は 19-20 世紀米国で教会音楽家として活動したフランクリン・シェファードの作曲とされているが、原曲はイギリス民

謡によるとされている。曲名の「TERRA BEATA」は、ラテン語で「祝福の大地」という意味。

・21-56「主よ、いのちのパンをさき」(= I 187)は、19-20 世紀米国のメソジスト信徒メアリー・ラスベリーの作詞で、夏期セミナーのために「聖書研究の歌」と題して書かれた。曲は、19 世紀米国で讃美歌作曲家として知られた音楽教師シャーウィンが、この歌詞のために作曲。

・21-434「主よ、みもとに」(= I 320)は、19 世紀英国のシェイクスピア俳優サラ・アダムズが作詞し、当初ユニテリアン派の讃美歌集に採用されて広まった。曲は、19 世紀米国の教会音楽家ローウェル・メーンソンがこの歌詞のために作曲した。

21-361「この世はみな」

THIS IS MY FATHER'S WORLD

1. This is my Father's world, / And to my listening ears / All nature sings, and round me rings / The music of the spheres. / This is my Father's world: / I rest me in the thought / Of rocks and trees, of skies and seas; / His hand the wonders wrought.
2. This is my Father's world, / The birds their carols raise, / The morning light, the lily white, / Declare their maker's praise. / This is my Father's world, / He shines in all that's fair; / In the rustling grass I hear him pass; / He speaks to me everywhere.
3. This is my Father's world. / O let me ne'er forget / That though the wrong seems oft so strong, / God is the ruler yet. / This is my Father's world: / why should my heart be sad? / The Lord is King; let the heavens ring! / God reigns; let the earth be glad!

21-56「主よ、いのちのパンをさき」

Break Thou the Bread of Life

1. Break Thou the bread of life, dear Lord, to me, / As Thou didst break the loaves beside the sea; / Beyond the sacred page I seek Thee, Lord; / My spirit pants for Thee, O living Word!
2. Bless Thou the truth, dear Lord, to me, to me, / As Thou didst bless the bread by Galilee; / Then shall all bondage cease, all fetters fall; / And I shall find my peace, my all in all.
3. Thou art the bread of life, O Lord, to me, / Thy holy Word the truth that saveth me; / Give me to eat and live with Thee above; / Teach me to love Thy truth, for Thou art love.
4. Oh, send Thy Spirit, Lord, now unto me, / That He may touch my eyes, and make me see: / Show me the truth concealed within Thy Word, / And in Thy Book revealed I see the Lord.

21-434「主よ、みもとに」

Nearer, my God, to Thee

- 1 Nearer, my God, to thee, nearer to thee! / E'en though it be a cross that raiseth me, / still all my song shall be, / nearer, my God, to thee; / nearer, my God, to thee, nearer to thee!
- 2 Though like the wanderer, the sun gone down, / darkness be over me, my rest a stone; / yet in my dreams I'd be / nearer, my God, to thee; / nearer, my God, to thee, nearer to thee!
- 3 There let the way appear, steps unto heaven; / all that thou sendest me, in mercy given; / angels to beckon me / nearer, my God, to thee; / nearer, my God, to thee, nearer to thee!
- 4 Then, with my waking thoughts bright with thy praise, / out of my stony griefs Bethel I'll raise; / so by my woes to be / nearer, my God, to thee; / nearer, my God, to thee, nearer to thee!
- 5 Or if, on joyful wing cleaving the sky, / sun, moon, and stars forgot, upward I fly, / still all my song shall be, / nearer, my God, to thee; / nearer, my God, to thee, nearer to thee!